

実践報告

# 自制心と共感能力を高め、 安心して自分を表現できる集団が育つ学級活動の研究

梶原 康裕\* ・ 上野 景三\*\*

Class Activities which Create a Community where Children can Express  
Themselves Freely by Increasing Their Self-control and  
Sympathy for Others

Yasuhiro KAJIWARA\* and Keizo UENO\*\*

## 【要約】

本実践報告では、子どもが集団の一員として、よりよい集団をつくっていくための取り組みに主体的に参画していくことができる実践力の育成をめざした学級活動の実践について報告する。子ども個人が学級集団に主体的に参加していくためには、個人として自制心をもつとともに、子ども間において相互に共感する能力をもつことが求められる。その結果として子どもが安心して自分を表現できる集団が育つと考えられる。このような個と集団の成長は表裏一体の関係にあるという考えの下、個人の資質と集団機能を相乗的に高めるための学級活動の在り方の方途を探ることを目的とする。

## 【キーワード】

学級活動、個と集団、自制心、共感能力、安心感

## I 研究の課題と概要

### 1 子どもの実態と子どもを取り巻く周囲の状況

学校生活上の諸問題に対して、一方で子どもたちは、「自分はできている。できていないのは他の人たち」と考える傾向が見受けられる。他方では自分の事情を優先させ、相手の事情を理解しようとしないうちに、問題解決に向かえないケースも生じている。こうした二つの傾向は、学童期の子どもの特徴かもしれないが、今の子どもたちにはそのことが顕著に表れており、そのことが子どもたちの間の信頼関係が深まらなかったり、集団内の安心感が広まらず自己表現できなかつたりすることにつながっている要因ではないかと考えられる。

このような状況の背景として、「ほめる」「認める」「受容する」などの関係性に重きを置いた学級活動に問題があると考えられる。そうしたかかわりは自己肯定感を高め、よりよい人格を形成するために必要なことではあるが、他方では、子どもの自分自身の課題と向き合うことや他者の言葉に耳を傾ける能力の育成を促す必要があると考えられる。

### 2 テーマ設定の意図

片岡徳雄<sup>(1)</sup>は、個性とは「その人なりのよさに向かうこと」と述べている。こうした個性が発揮され、互いの個性が磨き合える集団を育成していくためには、自己の内面をさらけ出せる安心感のある集団でなければならない。本研究では、安心して自分を表現できる集団をめざし、自制心と共感能力を高める方途を探る。自制心とは、「自分を抑えて自分を出さないようにする」という解釈が一般的であるが、本研究では、その場の状況に応じて、よりよい形で自分の感情・欲求・要求を出し入れしようとする態度とする。この自制心の育ちによって、集団の規律が保たれたり対人関係でのトラブルが回避されたりすると考える。共感能力とは、他者の経験を自分の経験と重ね合わせて知覚したり、他者がどう感じているかを察したりする能力のことである。共感能力の育ちによつ

\*佐賀大学文化教育学部附属小学校

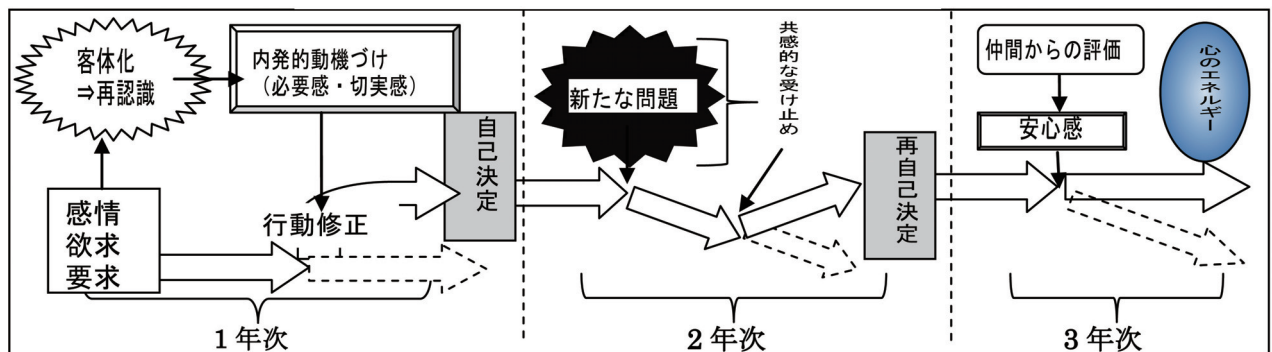
\*\*佐賀大学文化教育学部

て思いやりのあるあたたかい人間関係が形成され、一人一人の帰属意識や集団としての連帯感が高まっていくと考える。こうした自制心と共感能力の高まりによって、集団生活に秩序と相互理解のある安心感が広がり、主体的・実践的な活動の中で安心して自分を表現できる集団が育つと考える。

### 3 研究の概要（1～3年次）

本研究の1年次は、客観的な視点で自己を再認識する機会を設けたことで、自制心が高まり、自己決定をさせ、自ら行動修正を図ろうとする意欲をもたせることができた。2年次では、自己決定後の行動の持続レベルを低下させた新たな問題点を解決していく中に共感場面を仕組むことで、再自己決定させ実践の主体性が高まった。自己決定とは、自分が決めたことを守っていこうとする個人内の努力の姿である。ただそこには「やりっぱなし」の世界がある。自分の努力が本当によかったのか、またその努力の先に何があるのかが分かりにくい。それが行動の持続レベルを維持することを困難にする要因にもなる。そこで、個人の努力を評価する仲間の存在が必要になる。仲間から自分の努力を認められれば、大きな自信にもつながり、「よし、次もやってみよう」という心のエネルギーとなり、持続可能な実践活動につながる（図2）。

図2 3年間の研究構想図



## II 3年次における研究の視点と詳細

### 1 自己の変容に気づくとは（図3）

1, 2年次の取り組みを踏まえ、3年次では自己の変容に気づき、安心感を抱ける「ほわっとタイム」を行うことを目的とする。

子どもたちは自己決定をし、実践活動を通す中でも、自分で決めたことが本当に続けられるのか疑問に思ったり、意欲がわかなくなったりすることがある。それでも、自ら行動修正を図り、修正した行動を持続させようと努力をする。実践活動をしている中では自己の変容には気づきにくい。そこで、仲間からの評価により、これまでの活動の中で、できるようになったことや考え方が変わったことを見つめ直すことができる。自分が過去にできなかったことでも、努力を積み重ねて徐々にできるようになったことを仲間が評価してくれることで、意識していなかったことでも、自分の成長を感じることができ、自己の変容に気づくことができる。

### 2 安心感を抱ける「ほわっとタイム」

#### (1) 「ほわっとタイム」で目指すもの（図4）

これまでの1, 2年次の研究とは、個人内の努力による実践である。実践をしていく中で、うまくいかなかったことや、途中投げ出さなくなったこともあるであろう。「どうせ自分なんか」と努力しても自分に自信がもてずに前に進むことができなくなることもある。そうならないためにも、実践を通して個人で高められた力を仲間と共に全体としてさらに高め

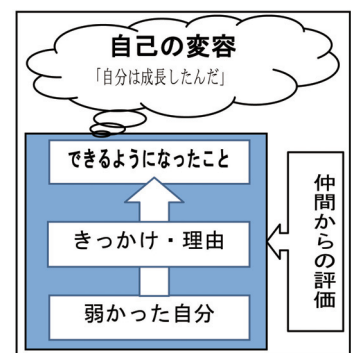


図3 自己の変容への気づき

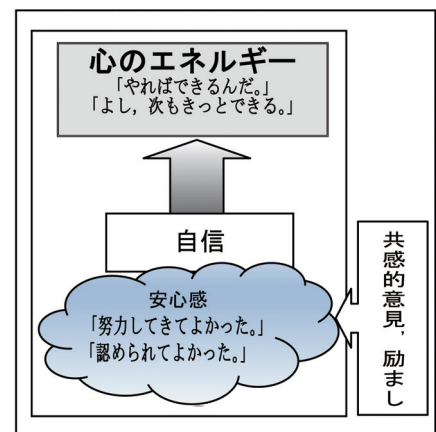


図4 「ほわっとタイム」で目指すイメージ

る必要がある。仲間からの共感的な意見や励ましにより、「努力してきてよかった」「認められてよかった」と安心感を抱くことができる。自分の長所も短所も含めて、自分を認め、お互いを認める環境を積み上げていくことで安心できる集団につながる。互いに伝え合う中で、安心感を抱き、自信を持つことができれば、心のエネルギーとなって実践活動も持続していくと考える。

(2) 「ほわっとタイム」の流れについて

人が安心感を抱くのは、自分が相手から「受け容れられている」「認められている」という感覚を抱く体験から始まる。自分の行動を「誰かが見てくれている」自分のために「誰かが何かをしてくれている」そういった人からの働きかけや人との交流の自覚が基盤となる。そこで、以下のステップで振り返り活動を行う。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 振り返りワークシートをもとに、取り組んだことや過去の気持ちについて小グループで伝え合う。</li><li>② 仲間話を聞いて「自分も同じようなことをした」「自分も同じような気持ちだった」というときには、仲間が書いているワークシートに発言をしながらシールを貼る。</li><li>③ 全員が伝え終わった後に、仲間に対して一言感想を付箋紙に書いて仲間に渡す。</li><li>④ 仲間との交流を通して感じたことについて振り返りワークシートに記述する。</li></ol> |
|---|

### Ⅲ 研究の実際

#### 1 視点を取り入れた題材の概要

(1) 題材 つかう人のことを考えて～トイレのスリッパ～（第2学年 児童数35人 平成26年1月）

(2) 題材を立ち上げるまでの経緯

スリッパをそろえる行為は、単に見た目だけのことではない。大切なのは、みんなで使うものだから、次に使う人への心配りである。多くの児童は、家庭に帰って玄関にあるはきものをそろえることを家庭内の役割の1つとして取り組んでいる。経験上、はきものをそろえなければならないということには分かっている。同様にトイレのスリッパを使った後、そろえなければならないということについても理解している。しかし、教師が見ている前では、トイレから出るときにスリッパをそろえているが、教師の目が届かないところでは、「めんどうだ」「早く遊びに行きたい」「誰かがしてくれるだろう」という思いから、スリッパをそろえない児童が多かった。

(3) 視点につながる題材の意義（表1）

本題材では、身近にあるトイレのスリッパもなかなかそろえられていない状況から、次に使う人のためにスリッパをそろえていこうという内発的な動機づけを高め、持続可能な実践活動にしていった。まず、「自分ではできているつもりでも、本当はできていない」という正確な自己認識を促すために、トイレのスリッパが乱れた写真と事前にとっておいたアンケート結果を見せた（「裸の王様タイム」）。その活動から、今後トイレのスリッパを使った後どうするかを各自で決めていくようにし（自己決定）、クラスで当番を決め、本当にスリッパをそろえている実践ができているか確認させた。しかし、自分で決めたことが守られていない実態が明らかになった。そこで、切実な問題意識をもたせるために、決めたことができなくなった背景（要因）を仲間と互いに受け止め合う活動を行い、再度自己決定を行う時間を設けた（「はりータイム」）。最後に実践のふりかえり活動を行った。まず振り返りカードを記入させた。そこには、以前の自分の気持ちと今の自分の気持ち、また以前の自分の行動と今の自分の行動を書かせ、自己の変容が分かるようにした。そして、小グループに分かれてお互いに今までの取り組みを伝え合う中で、自分が変わってきた気持ちや行動、他者と強く共感したことやこれからの自分の生活とのかかわりなど、考えをまとめる場を設定した（「ほわっとタイム」）。その活動を通して、大きな自信が生まれ、「これからも続けていこう」という思いとなり、持続可能な実践につながると考えた。

表1 題材の流れ

| 段階    | 時         | 活動の流れ   | 教師の働きかけ  | 評価             |
|-------|-----------|---|--|----------------|
| おこす   | 1         | トイレのスリッパがそろっていない写真とアンケート結果を見て、これから何をしていくかを自己決定した（「裸の王様」）。           | トイレのスリッパが乱れていることを認識できるように、毎時間撮りためた写真を見せた。                          | 関心<br>意欲<br>態度 |
| おこなう  | 課外        | 自己決定したことを実践した。  | 実践ができていないか確認ができるように、クラスで当番を決めた。                                    | 思考<br>判断<br>実践 |
| つくる   | 2         | トイレに入る際、スリッパがそろっている時とそろっていない時の気持ちを考え、これから何をしていくかを再自己決定した（「はりータイム」）。 | スリッパをそろえなかった要因を考えさせる中で内発的動機を強化した。自己決定に向かわせるために、小グループでの解決方法の場を設定した。 | 知識<br>理解       |
| おこなう  | 課外        | 再自己決定したことを実践した。   | クラスで当番を決めて確認させるとともに、自己評価カードに記入させ、実践ができていないか確認した。                   | 思考<br>判断<br>実践 |
| ふりかえる | 3<br>(視点) | 自分が取り組んできたことや過去の思いと現在の思いを伝え合った（「ほわっとタイム」）。                          | 共に努力してきたことをお互いが認め合い、自己の変容を認識できるように、付箋紙に一言コメントを書いて渡すように促した。         | 思考<br>判断<br>実践 |

## 2 視点にいたるまでに

### (1) 自己認識を促した「裸の王様タイム」

事前にスリッパそろえについてのアンケートをとった（表2）。アンケートの結果からは「そろえていない」と答えた子どもはおらず、ほとんどが「スリッパをそろえている」と答えていた。しかし、5日間休み時間のたびに続けたトイレのスリッパ写真を子どもたちに見せると、驚いたようにしていた。「自分ではトイレのスリッパをそろえている」と思っているが、実際はあまりそろえていない現状を知ることができ、自分自身の問題であるという正確な自己認識が促された。また、子どもたちにスリッパをそろえなければならない理由（表3）とスリッパをそろえなかった理由（表4）についての事前アンケートを提示し、スリッパそろえについての意義を考えさせた。最後に自分で何をしていくかの自己決定を行い、実践活動に入った。

表2 アンケート結果

|                        |     |
|------------------------|-----|
| つかったスリッパはそろえていない。      | 0人  |
| つかったスリッパはあまりそろえていない。   | 8人  |
| つかったスリッパはたまにそろえていた。    | 15人 |
| つかったスリッパはいつもそろえている。    | 5人  |
| ちらかっているスリッパもいっしょにそろえる。 | 7人  |

表3 スリッパをそろえなければならない理由

|  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・次に使う人がはきにくい。(21人)</li> <li>・次に使う人が気持ちよくなる。(10人)</li> <li>・次に使う人がいやな気持ちになる。(8人)</li> <li>・自分の心がよくなる。(7人)</li> <li>・学校がきれいになる。(1人)</li> <li>・初めて来た人に附属小学校をよく思ってもらいたい。(1人)</li> </ul> <p style="text-align: right;">※複数回答</p> |
|--|

表4 スリッパをそろえなかった理由

|   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・手で触りたくない。汚い。(17人)</li> <li>・めんどくさい。(12人)</li> <li>・友達も並べていなかった。みんなもしていない。(10人)</li> <li>・誰かが並べてくれる。(5人)</li> <li>・早く遊びに行きたかった。(4人)</li> <li>・授業が始まる。(4人)</li> <li>・どうでもいい。ほおっておこう。(2人)</li> </ul> |
|---|

### (2) 内発的動機を促した「はりータイム」

自己決定をした後、いったんは子どもたちがスリッパをそろえている姿を見る機会が増えたりすることがしばしばあった。今までよくスリッパをそろえていた子どもでも、自己決定したことを守れない日が続くようになった。そこで、「はりータイム」を設け、「なぜスリッパをそろえなかったのか」を小グループごとに考えさせた。子どもたちは、「めんどくさい」「きたない」「人が使ったスリッパを触りたくない」と、できなかった理由に共感しながら意見を出し合い、



付箋を貼った。全体で「できなかった理由」を共有する中で、「できなかったのは自分だけではない。もう一度何とか努力していこう」という内発的動機が促され、これからどのようにしていったらよいのかを再度考えた。それぞれのグループで考えた解決方法をもとに（図5）、各個人で再度自己決定に向かわせた。

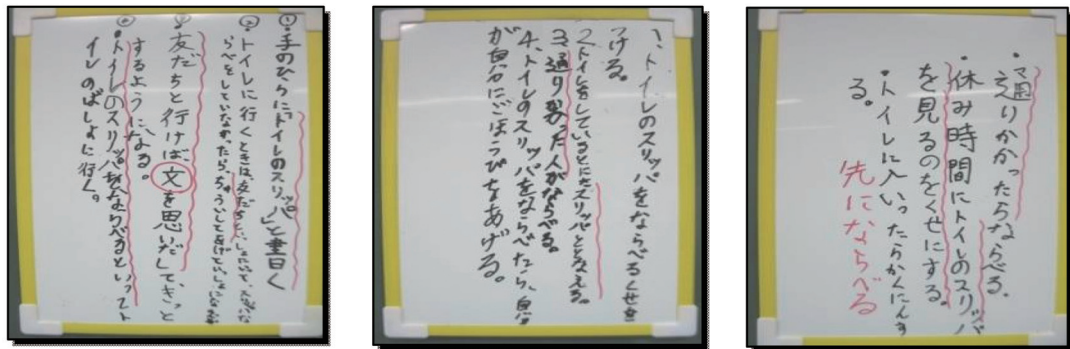


図5 小グループごとに考えたスリッパを並べる方法

### 3 「ほわっとタイム」について

#### (1) 「ほわっとタイム」を支えるワークシート（資料6）

今回の「ほわっとタイム」を行う前に、今までの実践を丁寧に紐解く必要がある。各自の実践の振り返りをワークシートに記入させた。そこには、「はりタイム」で再自己決定を行ったのはよいが、実践をする時の「始める前の気持ち」、活動を通していく中で「できるようになったこと」、そして、「できるようになったきっかけ（りゆう）」の記入欄を設けた。また、「ほわっとタイム」が終わった後には、これからの実践に向けて「今の気持ち」を記入させた。「ほわっとタイム」に入る前に、このワークシートに記入することで、今までは気づかなかった自己の変容に気づくきっかけをつくることができると考えた。

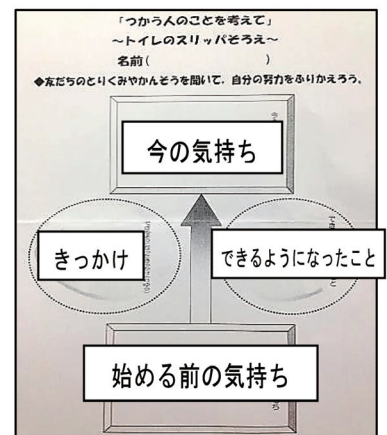


図6 振り返りのためのワークシート

#### (2) 「ほわっとタイム」の様相（表5）

資料7は、ワークシートを使って、今までの自分の取り組みやできるようになったきっかけなどを伝え合っている様子である。1人の子どもの発言に対し、グループの子どもたちは同じ経験や思いをしたときにシールを貼り合った。前頁資料4にある「スリッパをそろえなかった理由」で、多かったのが「手で触りたくない、汚い」「めんどくさい」「みんなもしていない」である。それぞれの理由から該当する3人を抽出し（資料8）、今までの実践活動を仲間と伝え合った感想から、視点の有効性を考察してみた。

表5 実践活動を伝え合う子どもの様相

C1 : みんなでスリッパを並べると気持ちがいいし、次に使う人も気持ちがいいからと思ったから、人が使ったスリッパも並べるようになりました。

C3 : 私もスリッパが並んでいると気持ちがいいと思います (シールを貼る)。

C2 : ぼくは、「めんどくさいなあ、早く遊びに行きたい」と思っていました。スリッパを並べるようになった理由は、家でもはきものをそろえると決めてから、頑張りました。そうしたら、お母さんからほめられてうれしかったです。

C4 : 私も家のトイレのスリッパを並べました (シールを貼る)。

C3 : 私は最初、本当に続けられるか自信がありませんでした。しかし、トイレに入るとき「スリッパを並べる」と言って入ると忘れずに並べることが多くなりました。

C1 : 先生が、「言いながらトイレに入ればいい」と言っていたよね。

C4 : 私は、人が使ったものを並べるのがいやだなあと考えていました。しかし、先生が授業の中で男子トイレと女子トイレのんでいないスリッパの写真を見せてから並べないといけないと思いました。すごく散らかっていたよね。ほらあの写真 (教室内の掲示写真を指さした後、シールを貼る)。



図7 実践活動を伝え合う子ども

表6 抽出児のプロフィール

|                | A児             | B児                             | C児                                       |
|----------------|----------------|--------------------------------|--|
| スリッパをそろえなかった理由 | 手で触りたくない。      | みんなもしていないからしない。                | めんどくさい。                                  |
| 自己決定した後の様子     | 足でスリッパをそろえていた。 | 一応そろえようという態度はあるが、きれいにはそろえなかった。 | スリッパをそろえようとする態度はほとんど見られない。脱いだスリッパが乱れていた。 |

(3) 安心感を抱いた「ほわっとタイム」

図8はA児のワークシートである。友達からの感想では(図8四角囲み)、「かならずならべると心がぼかぼかするよね」とある。今までは「手でさわりたいくない」という思いが、「ほわっとタイム」を通して「きたないと思わずに、自分からならべます」という気持ちに変わっている。その後のA児の感想(図9)には、「友だちから、これ同じって言ってくれてわたしだけじゃなかったなと思ってスリッパならべのをかまはた。1~6年生もスリッパならべをしてほしいです」とある。

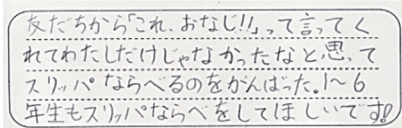


図9 A児の「ほわっとタイム」の感想

図10はB児のワークシートである。友達からの感想では(図10四角囲み)、「スリッパをならべるのはいいことでみんなハッピーになるよ」「わたしもほかのスリッパをならべようになったよ」とある。「みんなならべていないからしない」という思いが、「ほわっとタイム」を通して「これからもつづけていき

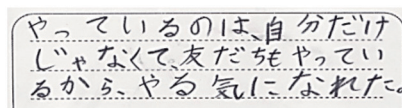


図11 B児の「ほわっとタイム」の感想

たい」と述べている。その後のB児の感想(図11)には、「やっているのは自分だけじゃなくて、友だちもやっているからやる気になれた」とある。

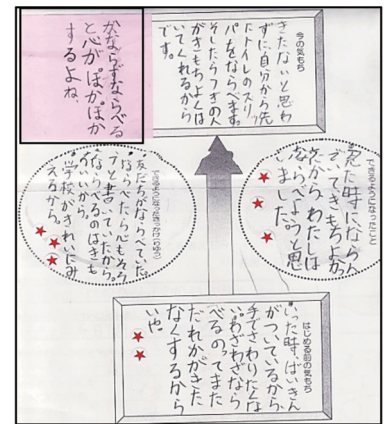


図8 A児のワークシート

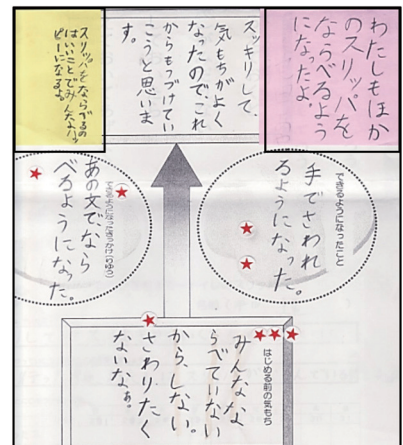


図10 B児のワークシート

から、やる気になれた」とある。友達が同じ思いや経験をしたことを聞いて、みんな続けているから自分も続けていこうという安心感を抱き、実践を継続しようとする意欲が表れている。

図12はC児のワークシートである。友達からの感想では（図12四角囲み）、「人のもならべられるようになってすごいね、わたしも同じだよ、これからもがんばってね」「トイレのスリッパもならべるといいですね」とある。「めんどくさいな」という思いが、「ほわっとタイム」を通して「自分からならべられるようになった」と述べている。その後のC児の感想（資料14）には、「みんながみとめてくれたからどんどんスリッパならべしようと思った」とある。友達がシールを貼ったり、感想を書いてくれたりする中で、自分の努力を認めてもらったという安心感を抱き、実践していこうとする意欲が表れている。

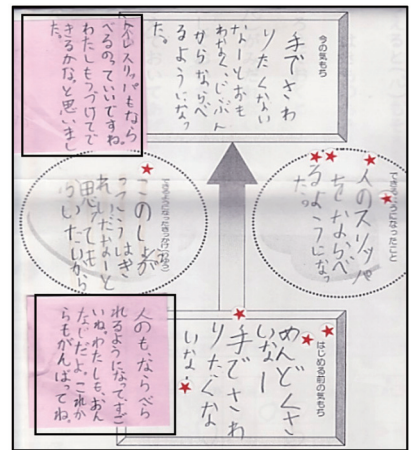


図12 C児のワークシート

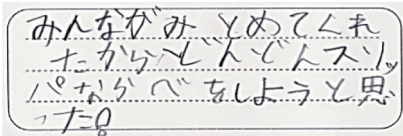


図13 C児の「ほわっとタイム」の感想

3人の感想からはいずれも、シールを貼ってもらい（ワークシート中の★）感想をもらったことで、「みんな同じ思いや体験をしてきた仲間がいる。これまで努力を重ねてできるようになった自分だけではない」という気持ちが表れている。このように、お互いが仲間の努力を認め合う中で、「努力してきてよかった」と自分を認め、お互いを認め合う環境を積み上げていくことで安心感を得ることができ、実践意欲にもつながったと考える。

(4) 自己の変容の気づきについて

表6はクラス全体で「できるようになったこと」を書き出したものである。スリッパをきれいに並べる方法は色々あるのだが、クラス全員がこのような具体的な行動の記述ができたのは、それぞれが実践を通す中で、「以前はできなかったことが、できるようになった」という自己の変容への気づきが表れている証拠だろう。「ほわっとタイム」後の抽出児の記述から探ってみた。

表6 クラス全体の「できるようになったこと」

|  |      |
|--|------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・脱ぐときに後ろ向きで並べる。(9人)</li> <li>・手でそろえる。(4人)</li> <li>・人が使ったスリッパも並べる。(12人)</li> <li>・トイレの前を通ったら並べる。(5人)</li> <li>・脱ぎ捨てなくなった。(2人)</li> <li>・間を空けて並べる。(1人)</li> <li>・せめて自分が使ったスリッパは並べる。(2人)</li> </ul> | 計35人 |
|--|------|

表7 抽出児の気持ちの変化

|              | A児   | B児  | C児   |
|--------------|--|---|--|
| 始める前の気持ち     | ばいきんがついているから <u>手でさわりたくない</u> ①。                               | <u>みんな並べていないからしない</u> ③。  | <u>めんどくさいな</u> ⑤。  |
| ほわっとタイム後の気持ち | むかしは手で触りたくないなあと思っていたけど、 <u>今は手を洗えばいいから、そのことは気にならなくなりました</u> ②。 | いぜんはスリッパをそろえなかったけど、 <u>今はみんなもやっているし、やる気が出て</u> ④ <u>並べるようになりました</u> 。 | いぜんは早く遊びに行きたくて <u>めんどくさかったけど、めんどくさいと思わず今は自分から並べる</u> ⑥ <u>ようになりました</u> 。 |

A児は、「手でさわりたくない」（実線部①）という思いであったが、学習を通して「気にならなくなりました」（実線部②）という気持ちに変わっている。スリッパはきたないというイメージがあったようだが、お互いに実践活動を伝え合う中で、手を洗えば済む問題だから気にせずに並べられるようになったようだ。B児は、「みんな並べていない」（実線部③）という思いであったが、スリッパをそろえている友達が増えてきたことに関して、「自分もやる気が出た」（実線部



④) という気持ちに変わっている。みんなスリッパをそろえていることが分かって自分もそろえようという気持ちになっている。C児は、「めんどくさいな」(実線部⑤)という思いであったが、今は「めんどくさいと思わず自分から進んでスリッパを並べる」(実線部⑥)と変わっている。めんどくさいという思いがなくなり、スリッパをそろえることが当たり前になるようになってきている。3人とも以前は「どうでもいい」「きたない」という思いからスリッパを並べていなかったが、「ほわっとタイム」を通してスリッパを並べていこうという気持ちに変わっている。お互いに実践活動を伝える中で、以前にはなかった自分の気持ちに向き合い、自己の変容に気づくことができている。

(5) 実践の継続化が見られた全体の様相と抽出児

子どもたちに「スリッパを必ずそろえた」か「そろえないときもあった」かの二択でアンケートをとった。それを前項「はりータイム」から「ほわっとタイム」そして、その10日後までのスリッパそろえについての実践の記録をまとめた(図14)。グラフを見ると、「はりータイム」の後、実践の継続が図られていることが分かるが、多少下降傾向は見受けられる。「ほわっとタイム」後を見てみると、多少の増減はあるものの、「ほわっとタイム」後もきわだった低下は見られない(図14点線囲み)。また、3人の抽出児童の実践活動の記録を見ると(図15)、こちらも「ほわっとタイム」前後では、きわだった低下は見られず、持続的な実践活動を行ったことが分かる。他者からの評価で、自分は変わることができたということが自信につながり、さらに友達がこれまでの努力と実践活動を認めてくれたことで、自分のことを誰かが見てくれているという安心感を得られていることが持続的な実践活動につながったと考える。

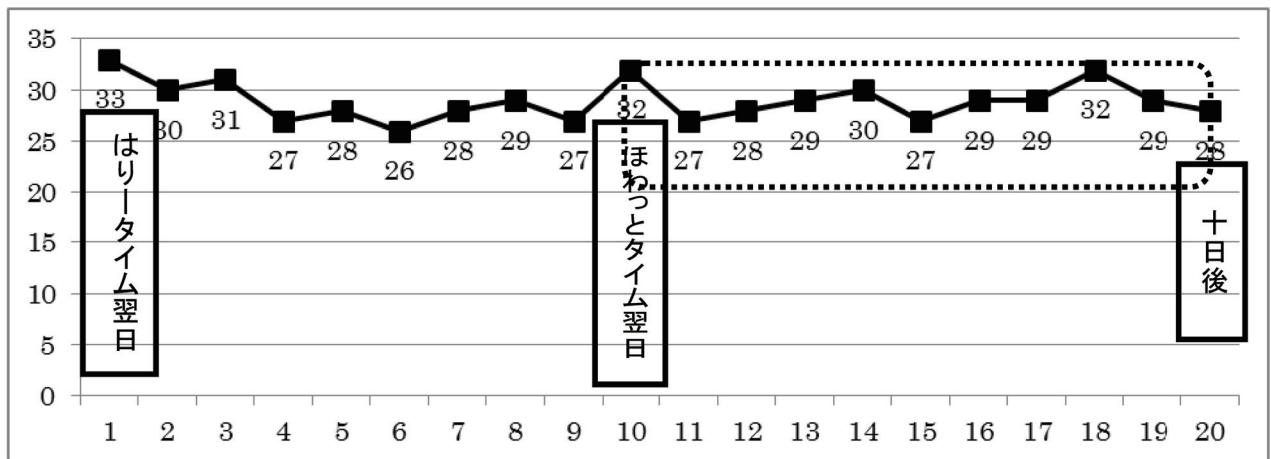


図14 全体のスリッパ並べの実践記録

○・・・スリッパをそろえた ×・・・そろえないこともあった /・・・休み

|    | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |   |
|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|
| A児 | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | × | × | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ×  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  |   |
| B児 | × | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ | × | ○  | ○  | ○  | ×  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ×  | ○ |
| C児 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | / | / | ○ | ○  | ○  | ○  | ○  | ×  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  |   |

図15 抽出児のスリッパ並べの実践記録



## IV 研究の整理

### 1 研究の成果

- ・ 「裸の王様タイム」では、正確な自己認識が促されたことで、行動修正に向かうきっかけとなり、内発的動機である必要感や切実感を高め、自制心が働いた。
- ・ 「はりータイム」では、実践ができていなかったことを安心して打ち明け、他者と共感しあうことで、必要感や切実感を伴った内発的動機が再強化され、継続した実践を後押しした。
- ・ 「ほわっとタイム」ではお互いに実践活動を伝え合う中で、安心感を抱き、自分自身に自信がもつことができ、その心のエネルギーが実践活動の継続につながった。

### 2 今後の展望

学級活動(2)について3年間研究を深めてきた。自己決定をさせ、実践の継続化を図る手立てを探ってきた。その中でも仲間との関わり合いが不可欠だということが分かった。そこで、仲間との意見交流の中で、仲間と違う考えや気持ちがあった場合に折り合いをつける方法を探っていきたい。

### 【参考文献】

- (1) 片岡徳雄『個性を開く教育』黎明書房1996  
佐賀大学文化教育学部附属小学校・中学校『研究紀要第1号』2012.  
佐賀大学文化教育学部附属小学校・中学校『研究紀要第2号』2013.